

24. 「おののえ」とは

問 松窓乙二の俳書に「おののえ」があります。書名の意味がわかりません。

答 松窓乙二⁽¹⁾が文化7年〔1810〕から10年〔1813〕まで、箱館〔明治2年以後函館と表記〕・松前⁽²⁾滞留中、その僑居を「斧の柄」と名付けました。そして、その際の諸篇を布席（榎窓）が編輯して文化9年〔1812〕に出版したのが「おののえ」⁽³⁾であります。

このおののえとは、爛柯〔らんか〕の故事即ち中国晋の王質⁽⁴⁾が木を伐りに山に行って仙童の囲碁の一局を見終えぬ中に斧の柄が朽ちているのに驚いて村に帰ると、知人は皆死んでいたという故事に基くもので、暫時の間〔ま〕とと思っているうちに、長年月を過すのたとえであります。このような意味をもつ「斧の柄朽つ」から取ったのが、乙二の僑居名であり、そこでまとめられた俳書の書名ということになります。

注(1) p. 14の注(1)参照

注(2) 文化7年〔1810〕9月13日箱館入港、布席のもとに至り、10月11日高竜寺境内地藏堂近くに「斧の柄」を営む、乙二56歳。「折る柴のなほ細かれや炉の煙」はその時の吟。9年〔1812〕病気のため松前に渡り、青標のもとに仮寓。9月14日城北山荘（妙運社）に移り、ここをも「斧の柄」と名付けた。この年「おののえ」編刊か。文化10年〔1813〕8月15日仙台に帰着、娘きよの許に滞在。

注(3) 乙二編、平角序、布席跋。奥付がないため文化8年箱館発行とされてきたが、内容から見て文化9年かそれ以後の編刊である。本書はアイヌ語が記されているので有名だが、乙二と来車との両吟歌仙「折柴の」の巻の次に72語ほど、草裾と乙二との同じく「抱籠や」の巻の次に61語ほど、「右両吟之内こと葉」として実に其の次に167語を、いずれも和夷辞彙の形で採録してある。文化7年9月半に渡道してから2年そこそこで、当時においてこれだけの語彙を作れたのは、勿論布席らの助力があったであろうが、乙二の努力と頭脳を証明するものである。

乙二は文政元年〔1818〕64歳の時再び渡道、松前に「斧の柄」を営み、3年5月8日白石に帰着している。

文政6年〔1823〕7月9日、69歳で白石で歿するが、乙二生存中は出版を許さなかった句集を、きよ女・十竹の姉弟が父に秘して編集し、2ヶ月後の9月5日〔跋〕「松窓句集」1冊として刊行した、この書の内題も「をののえ草稿」としてある。

注(4) 「述異記」に『信安県石室中晋時樵者王質逢二童子碁與質一物如棗核食之不飢置斧子坐而觀童子曰汝斧柯爛矣質歸郷間無復時人』

「水経」に『信安県有県宝坂晋中朝時有民王質伐木至石室中聽童子四人彈琴而歌云云俄頃〔がけい。瞬時〕斧柯爛〔くされ〕尽』とあり、この故事を「爛柯」〔らんか。爛は腐れる、朽ちる。柯は斧の柄〕という。

資料 大漢和辞典（諸橋轍次）

25. 「同朋」とはどのような役か

問 「同朋」とはどのような役ですか。「広瀬川の歴史と伝説」（三原良吉）に『御同朋ごどうぼうといつて、ほつたい法体で君側に侍した花見円阿弥が万治元年八月五日、義山公忠宗に殉じて切腹した時この寺〔曹洞宗長徳寺(1)〕に葬って円阿弥塚と称したが、年々ガケがくずれて、とっくの昔になくなってしまった。』などと出てきます。

答 女性を入れなかった城中に於て、君側に近侍してその身の給仕その他の雑務に当り、公文書類の送達や、礼式慣例に通じ特殊な芸能諸事をつかさどり、同じ職務系統の多数の坊主を監督し(3)た専門職で、僧体で阿弥号を名乗ったものです。

「仙台風俗志」（鈴木省三）に次のように記しています。『同朋 御同朋といふ これ法体なれとも服装は大に前の諸職（僧侶・修験・医師・画員・茶道・連歌師）に異なりて袴を着用し又礼としては上下〔かみしも〕を用うるが故一寸目立て可笑〔おか〕しき程なり 且名も別段にて何の阿弥あみといふ これは足利義政の同朋に真阿弥・芸阿弥・相阿弥などいへるがありし故これに倣らへてかく称するなるへし

坊主ぼうず これは表坊主と奥坊主と二様あり 円頂の小使役を勤むる者なり』

「仙台人名大辞書」（菊田定郷）の中には『仙台藩の家中〔前略〕右の外士分にては御医師、御茶道、御同朋、御馬乗、御台所人、御番外等あり……参考に供すべきものなきを以て略せり。』とあります。

「仙台府諸士版籍」（「仙台叢書」第6巻の内）に幕末頃の同朋の氏名給与が記録されています。

『御同朋』

- | | |
|-------------|-------|
| 一 小判参両参人分 | 芳賀恭阿弥 |
| 知行貳貫分 | |
| 一 小判六両八人分 | 星春阿弥 |
| 一 小判参両貳分参人分 | 松浦悦阿弥 |